



TITLE:

<巻頭言>モノと出会う・モノから
学ぶ

AUTHOR(S):

渡邊, 洋子

CITATION:

渡邊, 洋子. <巻頭言>モノと出会う・モノから学ぶ. 京都大学生涯教育フ
ィールド研究 2016, 4: 1-2

ISSUE DATE:

2016-03-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209022>

RIGHT:

【巻頭言】

モノと出会う・モノから学ぶ

渡邊洋子

Meeting a Thing ; Learning from a Thing

WATANABE, Yoko

数年前、オックスフォード大学図書館の特別展示で面白いものを見つけた。すべてのページが手書きで書かれた、文字通り「手づくり」の本である。子ども図書館や児童館などで絵本づくり教室をよく見かける昨今、あまり珍しいと思われないが、実は貴重本である。

高校世界史の教科書に物語集「デカメロン」のことが出てくる。ボッカチオ (**Giovanni Boccaccio**, 1313-1375) はルネッサンス期のフィレンツェ出身の詩人・散文作家であり、私がたまたま見た展示は、ボッカチオを含む3人の中世イタリアの巨匠の特集であった。

ウィンドウ越しに見たのは一抱えもある大きな本であり、見開きのページには、カリグラフィ（飾り文字）の優雅な書体で、物語がびっしりと書かれていた。「描かれて」との表現が正確かもしれない。左下の3割ほどのスペースには登場人物が、頭巾や髪飾りから衣装の隅々まで実に緻密に丹念に描かれ、鮮やかな色の絵の具で描き込まれている。

文字と挿絵を仕切るラインにも細かい手描きの模様が付され、絵の具を上塗りするように金色の縁取りが施されていた。完成したばかりのようなみずみずしい色合いと繊細な絵の具の盛り上がり具合が、みる者の心を引きつける。

展示されていた見開きだけでなく、20センチ近く厚みのあるページがすべて、同様の芸術作品で覆い尽くされていたことが推し測られた。

活版印刷は中国・韓国では11、12世紀以降、ヨーロッパでは1445年にグーテンベルク (**Johannes Gutenberg**, 1400頃-1468) が始めたのであるから、一度に何冊の本も作ることができない中で制作された本である。

その装丁に目を奪われて立ち尽くす中で、ウィンドウのはるか彼方に、ボッカチオの面影が、1ページ1ページ、渾身の作品として仕上げていったカリグラファーたちや挿絵師たちの後ろ姿が、文字や挿絵の美しさと物語の世界を堪能する人たちの恍惚の表情やまなざしが、また本を覗きながらの和やかな語らいが、微かに見えたような気がした。

手にとって読んだわけではないのに、ひと時にたくさんのことを学んだ気がする、本との不思議な出会いであった。

時空を超えて活字から学べるものが膨大に存在する一方で、活字では決して学べないことを、モノが語り、教えてくれることもある。モノについて研究・解説書でゆたかに学ぶことができる一方で、既存の研究からは学びきれない、あるいはそこから零れ落ちてしまった少なからぬ真実を、モノからのメッセージを探り当てながら、学び取ることもできる。

モノはモノとしてあるだけでなく、そのモノに関わって暮らした人々が、どう生きたか、何を感じたか、何を考えたか、互いにどう関わっていたか、など多くのことを内包した記録物でもある。その息づかいから何を学び取るのか、どんな生活の知恵や工夫を読み取り、困難を乗り越えるための、いかなる示唆や教訓を引き出していけるのか。これらは、時空を超えて生きる私たちに、先行世代から与えられた「宿題」かもしれない。

キャッチボールのように受け取ったこの「宿題」に、どう取り組んでいくのか。
そして、後継世代にどのように投げ返していくのか。
一人の学び手としても、一人の研究者としても、多くが問われている。
新たな知や価値を創り出す力の根源は、まさにこの試行錯誤の中にあるに違いない。